

(海外・国内) 出張報告書 (学生用)

2014 年 10 月 27 日提出

氏名	鈴木 瑞穂
所属	微生物学教室
学年	博士課程 1 年
出張先	モンゴル国
出張期間	2014 年 8 月 28 日～2014 年 9 月 7 日
目的	モンゴルのカモにおけるインフルエンザウイルス保有状況の調査

活動内容 (2,000 字程度、活動内容が判る様な写真や図表を加えて下さい)

8 月 29 日

サンプリングに先立ち、モンゴル国 State central veterinary laboratory(Central Lab.)を訪問し、所長とこれまでのサーベイランスの実績についての話と、今年のサーベイランスについての挨拶をした。さらに Central Lab. の施設を見学。主に豚コレラ診断に使用するという BSL3 施設などが充実していた。モンゴル国に BSL3 施設はここにしかないということ。建物自体は、工事中の鉄筋がむき出しだったりと驚くような状態だったが、中の設備は各国の支援や視察(特に韓国)も入っているため、しっかりしていると感じた。



Central Lab.の所長(右から 3 人目)と

8 月 30 日～31 日

Central Lab.新人職員の SelengeByambadori さんと合流し、ウランバートルを出発。ウギヌール湖へ向けて車で 5 時間移動。最大のウギヌール湖は観光地として人気になり、カモ類の飛来がなくなった模様。到着時も複数の観光客(外国人も多い)で賑わっていた。



サンプリング準備を完了した姿

ウギヌール湖の周囲を回り、昨年と同じ周辺の小さな湖(ツァガンヌール)でカモの糞便を確認したため、採材を開始した。長靴を装着し、糞便保存用のチューブと、拾い上げるスティックを持って岸を回る。100 サンプル採取。

翌日はウギヌール湖から西に少し移動して、別の湖で採材。現地の方のゲルが遠くに見え、ヤギ・ヒツジの群れがいるものの、他に人の気配はなく、カモ・サギ・タカ

など様々な野鳥も見られた。南側の岸から採材を始めるが、あまり糞便が見つからない。昼過ぎに到達した北側の岸にカモの糞を多く見つけ、集中的に採材する。

9月1日～2日

北へ移動し、標高の高く、現地の人しかいない湖へ。湖ごとに周辺の植生や泉質が違い、場所や緯度も違うため、糞の色形や鳥の種類が違う。

放牧された家畜が水を飲みにやってくるため、岸辺に家畜の糞便が多く、新鮮なカモの糞を選別するのに難航するところも多い。

天候にも恵まれ、順調にサンプリングを継続。特にモンゴル側職員の **Selenge** さんの糞を見つける速さと沼地の歩く速さが速く、彼女が一番多くサンプルを集めていた。

2日の夜には、ドライバーの伯母さんのお宅（ゲル）に泊めてもらう。これまでの宿泊施設としてのゲルとは違い、一般の民家で、遊牧民の実際の生活を間近に見ることができた。家畜の搾乳にも同行でき、非常に良い経験を得た。



採取した糞便の整理の様子



(左右)
湖でのサンプリングの様子



ドライバーの親戚の皆さんと、お宅の前で



家畜が湖畔に多く、糞便採取が困難な場合も

9月3日

サンプリングの実質最終日。岸边が砂地の大きな湖（シャルガヌール）で最後のサンプリングをした。

今回のサンプリングで最北の湖だが、カモの数はこれまでの湖と差がない。すでに南下したのだろうかという話になった。周辺の水溜りにカモが多く、そこで糞便を採取した。予定数の 1,000 サンプルを採取し終える。

9月4日

車でウランバートルへの移動。

9月5日～

サンプリング終了後、Lob.の家畜伝染病部門の主任に終了の挨拶へ。そこで、口蹄疫を含めた家畜伝染病の制御について、モンゴルの考え方を聞く。日本ではすでに制御され撲滅した伝染病も、モンゴルでは流行しているので、日本とは違い実際の患畜の診断業務について話を聞いたのは、とても貴重な機会だった。他国と陸続きという状況も日本と異なるため、勉強になった。

部門の考え方として、各伝染病について、研究の進んだ諸外国のチームと共同研究を積極的に取り入れてモンゴル国内の診断・研究技術を上げようということを聞いた。自身の機関に技術面での危機感を持ち、それを解決しようという姿勢は好ましかった。方法としては賛否あるだろうが、私は論理的な判断だと感じた。実際、各スタッフも積極的に海外研究機関への留学を取り入れており、外国語を話せるスタッフも多かった。



家畜伝染病部門のオフィスにて

モンゴルでの鳥インフルエンザ発生は、2010年-2011年に東アジアで流行した事例以来、野鳥の斃死などはないが、このサーベイランスは継続していくこと、できればウイルス分離・診断の段階まで自分たちで行えるようになるための技術習得を希望していた。他の動物のインフルエンザとしては、モンゴル国民にとって価値の高いウマインフルエンザの流行が伝統行事の都合上毎年起こっているようだ。国民もその制御に関心が高い。特に財産であるウマには高価な海外製のワクチンを接種している。モンゴル国内で流行株に合わせて開発したワクチンがあるが、その使用率が低い点が課題とのこと。各動物のインフルエンザの発生は、隣国の中国での流行が一番大きく影響しているので、中国の動向はやはり気になるようだ。

本渡航とは無関係であるが、渡航時には西アフリカを中心としたエボラ出血熱の流

行があり、モンゴル国機関としてもその対応について苦慮しているところであった。モンゴル国保健省や WHO モンゴルオフィスの職員から、高田教授へ助言を求める場面があり、ウイルス学の専門家として、実際の疾病対策に対してどう貢献と責任を果たすかを学ぶことができ、非常に貴重な経験となった。

指導教員確認欄	所属・職・氏名： 獣医学研究科 微生物学教室 教授 迫田 義博 印
---------	--

※1 電子媒体を e-mail で国際連携推進室・リーディング大学院担当に提出するとともに、指導教員が押印した原本を国際連携推進室・リーディング大学院担当に提出して下さい。

提出先：国際連携推進室・リーディング大学院担当

内線：9545 e-mail: leading@vetmed.hokudai.ac.jp